



長野市立博物館
NAGANO CITY MUSEUM



博物館だより

Nagano City Museum

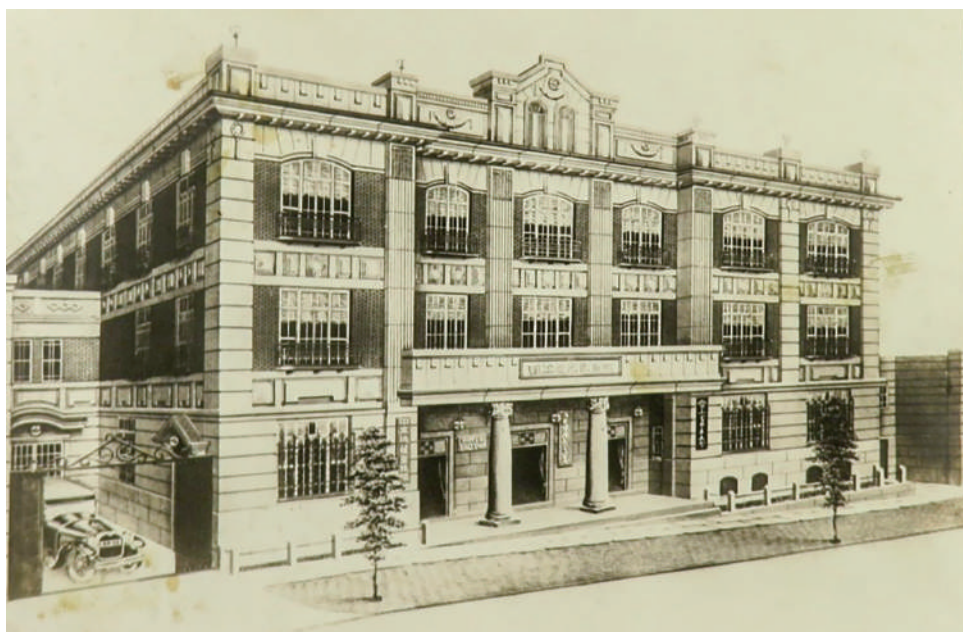
第135号

令和7年秋季企画展紹介

平五郎座右記 ～藤屋御本陳と変わり行く門前町～



現在の藤屋旅館 THE FUJIYA GOHONJIN 本館（藤屋御本陳提供）



藤屋旅館建設時の
完成予想画（当館蔵）

多くの善光寺参詣者を迎えてきた善光寺町。その中央を通る「善光寺表参道」で親しまれてきた建物のひとつに藤屋御本陳があります。かつてはホテルとして利用されていた和魂洋才の建物は、2025年に築100年を迎えました。

フロア 大正14年、和魂洋才の館

大門町の大通りを拡張することに伴い、大正14（1925）年に建設された藤屋旅館は、善光寺門前、そして北国街道の宿場町として発展してきた町の精神を引き継ぎながらも、アールデコ調を模した洋風建築でした。この建物が建設された時代は、町が広がり、町並みが新しくなった頃でした。移り行く時代とともに人々を迎えてきた善光寺門前を象徴する建物といえます。

近世には宿場としても栄えた善光寺町において、藤屋は大名たちが休息をとる本陣の役割を果たしており、当主は代々平五郎を襲名し、町年寄となると平内を名乗ってきました。代々の当主たちは日記をしたためてきました（写真1）。日記の中には、身近なことを傍らに書き留めておくという意味の「座右記」という題がみられます。こうした日記からは、明治～大正時代に町が変わって行く様子がわかり、和魂洋才の建物が建つ町となるまでの変化を読み取ることができます。

令和7（2025）年10月11日から11月30日にかけて、長野市立博物館では、長野市大門町にある藤井家⁽¹⁾についての展示を行います。この展示では、江戸時代末～

大正時代初期における平五郎の日記からわかることを中心として、藤井家に伝わる様々な資料を展示し、時代とともに変わり行く町と家の姿を紹介します。今回のだよりでは、この展示の内容を詳しく紹介したいと思います。

第1章 「御本陣」と善光寺宿

江戸時代のにぎわいを見せた善光寺町。中でも宿場町でもあった大門町には、北国街道が通り、宿が多くありました。そこで、藤屋は諸大名が休息をとる本陣の役目を務めていました。この章では、当館が所蔵する「善光寺宿本陣藤井家文書」などを中心に、江戸時代における善光寺宿のにぎわいや藤井家が務めた本陣としての役割を紹介します。

◎藤井家

藤井家は、藤井伊右衛門（長野市西之門町・酒屋を営む）の分家にあたり、本陣を務めていました。本陣とは、大名などが宿泊する幕府公認の宿のことです。江戸時代中期まではいくつかの家が交代で務めていましたが、安永5（1776）年から、藤井家が単独で務めるようになりました。善光寺町には藤井伊右衛門家からの分家がいくつ



写真1 日記類（当館蔵）

藤井家文書には、8代平五郎・穀昌、9代平五郎・欽昌、10代平五郎・治昌、12代平五郎・幸蔵による日記が含まれる。江戸時代後期から大正初期のことが綴られている。

があり、藤屋や藤井を名乗ってきました⁽²⁾が、今回の展示では、この本陣を務めていた家を藤井家、あるいは藤屋と呼びます。

江戸時代には、藤井家は「藤屋平五郎」と呼ばれていました。藤井家の家紋は三つ藤巴紋、家印は写真2です。この2つの印は、藤井家を示し、特に、家印は様々な資料に見ることができます。家印は、家が所有物を示すために使われる印ですが、藤屋をはじめとした大門町の家では商標のように使われており、この家印だけで藤屋平五郎のことを示すこともありました。現在藤井家が経営しているパティスリーの名称やパッケージに「平五郎」やこの家印を見ることができるのは、こうした家の歴史的背景を示しているためなのです。現在も屋号と家印が建物の看板に使われています（写真3）。

藤屋には、加賀前田家や高田榊原家の関係者が利用した記録が残っています。大門町は、善光寺町の他の町と異なり、北国街道

泊させていたことを問題視する文書などもあり、幕末にはこの役割分担が崩れていたことがうかがえますが、従来は大門町以外で善光寺の参拝者を宿泊させ、大門町では北国街道を利用する人々を相手にすることになっていました。その中でも本陣だった藤屋は、北国街道を使う藩主などが善光寺町を通る際に利用していたのです。真田家も休憩に使用しており、日記には「松代様」が休んだ旨が記載されています。藩主が宿泊・休憩する際には関札を掲げ、藩主が利用していることがわかるようになっていました。その関札の下書きが残っています（写真4）。この文字の看板を作り、入口と出口にそれぞれ設置していたようです。

戊辰戦争の際には、町の様々な宿屋で官軍が宿泊・休憩をしています。藤屋平五郎には「驛路締方」が訪れました。また、大所帯の旅客相手には、実際には宿や伝馬を大門町の宿場や従来の助郷村（宿駅で賄いきれない人馬を提供した村）でも賄うこと



写真2 家印

（古写真（当館蔵）をトリミング）



写真3

看板「ふぢや平五郎」
（藤屋御本陳提供）

の宿場町という性格が強かった町でした⁽³⁾。善光寺町を通して往来する人のための宿や伝馬を担ってきたと考えられています。大門町以外の宿で北国街道を利用する客を宿

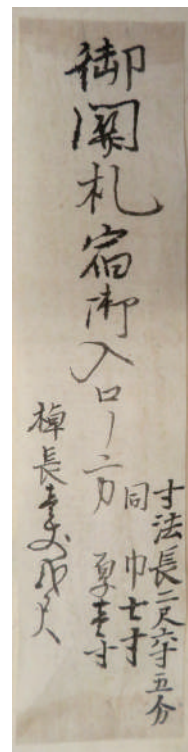


写真4 関札の下書（当館蔵）

右のように、裏面に寸法や棹の長さが書かれている。

ができず、様々な町や村で人馬を提供し、宿を担っていたということもわかります。松代藩は官軍として戊辰戦争に加わっており、藤屋には宿泊していませんが、善光寺宿で伝馬を請け負っていました。

第2章 平五郎と長野の近代化

人々が鉄道を利用するようになった時代、藤井家は對旭館^{たいきよくかん}という旅館を経営し、長野停車場（現長野駅）近くに支店を設けます。明治に制度が変わるのに対応し、新たな経営に乗り出すとともに、旅行組合の組織化にかかわりました。また、10代平五郎は長野市議会議員となります。ここでは、県庁所在地となり町の人口が増え、鉄道が通り、電燈がとる、といったように、町が徐々に変化していく様子を、「平五郎の日記」を入り口に紹介します。

座右記（明治2～6年）

9代平五郎・欽昌が書いた日記です。江戸から明治へと、体制や制度が変わっていく様子が垣間見られます。

◎驛逓制度の徹底、混乱、廃止、民営化

明治政府は当初、街道沿いの宿場と助郷を一体化して役割を徹底し、強化するため、「驛逓制^{えききてい}」を定めました。しかし、それを明治3（1870）年には改正してしまいます⁽⁴⁾。こうした変化は現場で混乱を起こし、反対意見が出ていたようです。日記には、制度の度々の変更についての通達があり、善光寺町や助郷村の人々と相談している様子が書かれています。特に、明治3年3月12日の日記には、「今般驛逓之事」について、事前に挨拶がなかったことなどから、町や村で反発を招いていた様子が書かれています。

また、明治3年には本陣が廃止されます。

藤屋ではそれに応じて脇本陣とも協議しており、互いにどのような宿泊者を持つか取り決めをしています。その後、荷や人を運ぶ役割についても、民営化されました。

◎貨幣の変更

貨幣の変化についても、日記から読み取れます。幕末から、通貨不足による混乱は度々ありました。そのため、明治になり、当時の信濃国内の藩は「信濃全国通用銭札」を発行しました。これは「藩札」と呼ばれましたが、発行されてすぐに藩独自の紙幣発行が禁止されたため、明治3年7月には使えなくなってしまいました。

日記には、明治3年7月30日に「藩札」が使えなくなったことが書かれています。8月1日には「藩札」を持ってきた客がいましたが、通用していないものを受け取ってしまうと不都合なため、5両の内1両だけをその場で支払ってもらい、残りの4両は近日中に持参してもらうことにしたようです。

◎「中野時件」から、県庁所在地・長野町へ

明治3年に中野県が置かれた当初、県庁は現在の中野市にありましたが、この県庁は同年12月に焼き討ちにあってしまいました。この事件は、一般的には中野騒動と呼ばれ、「平五郎の日記」では「中野時件」と書かれています。また、この時、善光寺町や近隣の町・村で打ちこわしがあったと聞いた、という旨の記述が日記にみられます。この事件の後、県庁は善光寺町に移転することとなりました。そのため、善光寺町には県関係者がよく訪れるようになります。日記には、「中野時件」に伴って県の関係者が藤屋を利用していたことが書かれています。

県庁が移転したことによって、善光寺町

の人口は増加し、明治7（1874）年には長野町が発足します。特に大門町では、増加する人口に対応するために日用品を外の村々から仕入れなければならなくなったため、市場開設願が出されました。「藤井平五郎」は、この願書に大門町上組の願人総代として名を連ねています。

このような変化によって、大門町をはじめとした善光寺町は、県庁所在地・長野町となったのです。

座右記（明治20～22年／明治26～27年）

10代平五郎・治昌による日記です。この時期に、鉄道が開通し、電燈がともる準備が進められていた様子がうかがえます。

◎鉄道開通、長野停車場

明治21（1888）年、鉄道が直江津から長野まで開通します。この年、長野停車場が開業し、その前に藤屋は支店を出します（写真5）。日記からは、10代平五郎が支店を出すために毎日のように停車場前を視察していることがわかります。また、長野停車場の開通式のこと書かれています。開通式は、新しく開通した道路である一線路と二線路の開通記念を兼ね、海軍大臣や鉄道局長、県知事を招いていたにも関わらず、積雪と大嵐に見舞われたようです。

◎電燈がともる

明治27（1894）年から、日記には度々電燈についての記述がみられるようになります。後の明治30（1897）年に長野電燈株式会社（大門町に本社があった電力会社）を設立する小坂氏と相談をし、図面の確認や測量をしていました。発電所が設けられる茂菅村の人とも話をしており、長野の町に電燈がともる準備が進められていたことがうかがえます。



写真5 明治末～大正初期頃の藤屋長野停車場前支店
（当館蔵）

長野停車場前に藤屋が出した支店の写真であり、ここから人を運んだとみられる人力車が写っている。

◎新たな経営戦略

江戸時代末頃には、街道沿いの宿屋が講と呼ばれる組合のような組織を作りました。講に属すことは、旅人にとって悪い商売をしていない証のような役割も果たしていました。本陣も幕府公認の宿であり、江戸時代の制度に支えられた宿だったといえます。明治維新に伴う制度改正や鉄道網の発展に伴い、こうした講のような江戸時代のネットワークに支えられた街道沿いの旅籠は、経営が難しくなったとされることがあります。しかし、藤井家などの大門町の店は、長野停車場前に支店を出すなどして、新たな経営を行います。

藤井家は明治になってから浪花講に参加しました。浪花講は、江戸時代末の大阪で

発足し、主要街道沿いの旅館が所属した講です。藤井家は、そのネットワークを活かして長野町の宿泊業者で人力車を手配し、長野停車場から人を運ぶ仕掛けを作りました。講は鉄道網の発展とともに衰退したとされますが、長野町では後には旅行組合として組織化され、県議会議員選挙に旅行組合から「藤井平五郎」が擁立されました。鉄道の開通によって生活や旅行者の行動が大きく変わる中でもそれまでのネットワークを活かしながら新たな体制を組み、時代状況に応じた経営戦略に乗り出していた家があったといえるでしょう。大正期に藤屋は、長野町の観光案内地図と藤屋の宿泊料に、長野駅の時刻表などの鉄道情報を加えた案内を出し、鉄道利用者を集客しようとしていました。夜行列車を使用する人は宿泊料を四分の三にするなど、鉄道利用者の利便性を上げようとしていたことがうかがえます。

藤井家の他にも、制度の改正や鉄道の開通に応じて新たな経営戦略をとってきた家がありました。例えば、中沢家は、近世に町年寄を務め、宿問屋を営んでいました。明治になり政府が設けた伝馬所やその

後継の陸運元会社に対し、中牛馬会社を中心になって立ち上げました。鉄道の開通によって会社は小さく分かれるなどしましたが、大門町にレンガ造りの社屋を設けました。その分家にあたる家は、扇屋金四郎として宿屋を営んでいました。扇屋金四郎は、一新講という宿泊業者の講に属するなどして、北国街道の旅人や善光寺の参拝者を泊めていました。この家も藤井家のように、鉄道の開通に伴って長野停車場前に支店を設け、人力車による人の運搬を行うようになりました。

第3章 町の広がり—大門町と藤井家—

大正後期には、町、さらには長野市が広がり、町は変化していきます。

明治末から大正初めにかけて、長野市内で最も商店が多かったのは大門町でした。近世には伝馬町であり北国街道の旅籠があった大門町は、交通の要所という性格を持っていました。同時に、近代には長野停車場と善光寺を繋ぐ道の途中ともなったため、道の拡幅によって交通の便をよくすることが求められました。その大門町で、12代平五郎は、大正6（1917）年から二

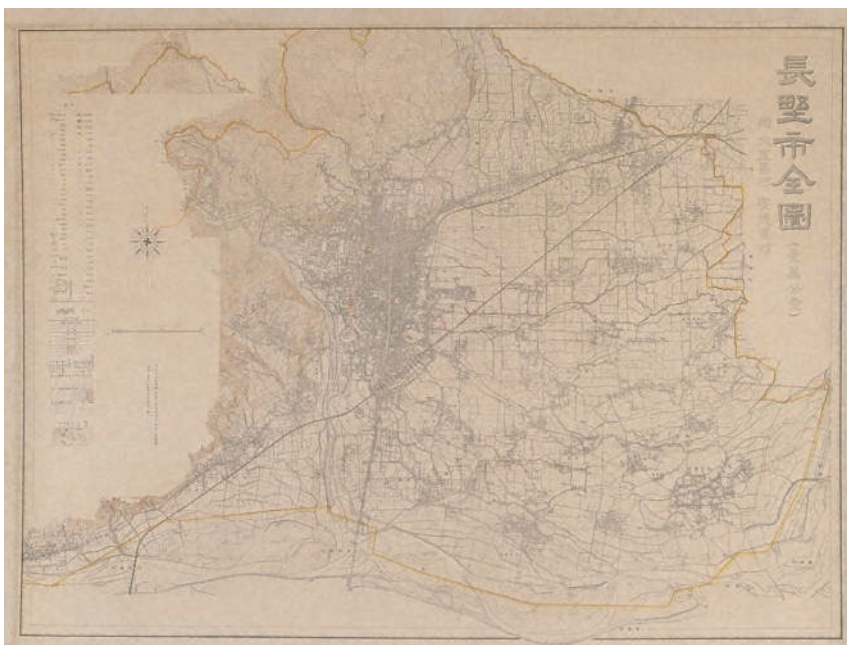


写真6 長野市地図（当館蔵）

大正15（1926）年、市域拡大後の長野市全図。

年間、大門町上組の区長を務めました。大門町では、明治後期に祭礼屋台を新調していますが、その際には藤井家が多く出資しています。「平五郎の日記」にも、屋台再興についての記述が度々みられます。

また、長野市では町村合併を見越した都市整備が進められました。長野市は大正12（1923）年に1町3ヵ村と合併し、市域を広げます。この合併で、吉田町、芹田村、古牧村、三輪村が長野市となりました（写真6）。

この時、12代平五郎は中央道路改修委員会の分掌委員でした。道路の拡張には、通り沿いの建物の引き込みが必要でした。引き込みをしなければならない家には、補償金が支払われるものの、店舗や住居を狭めなくてはなりません。敷地が狭い家では、店舗だけを残して住居を移さなければならず、合意を得るのは難しかったのでしょう。道路沿いの各町から1人ずつ分掌委員が選出されました。12代平五郎は、分掌委員として町内の合意を得る努力をしたのではないかと推察されます。道路に面していた藤屋も引き込みが必要となり、建て替えられ、新しい藤屋ホテルが建ちました。これが、今年築百年を迎えた建物です（表紙口絵）。

近代以降の都市計画的観点からすると、大門町をはじめとした善光寺門前は、明治維新前後の都市の連続性が強く、鉄道の開通に大きな影響を受けながらも、旧来の通りに沿って道路が拡張されるなど、都市基盤は近世以来の考え方に強く影響を受けているとされています⁽⁵⁾。中央道路の改修後の状況を見ると、道路の拡張・改修は鉄道の開通や長野停車場の開場による影響が強いものでありながら、善光寺と長野停車場は一直線につながっていないことがわかります（写真7）。これは、家屋や店舗の軒

先を下げるだけで道路の拡張をし、旧来の道が残されたためと考えられます。特に、藤屋があった大門町のあたりの道の通り方は変わっておらず、近世から使われてきた道を活かしたまま道路が拡張され、洋風の建物が立ち並ぶようになって行ったとみることができます。

道路の拡張・改修に伴って建てられた建物の設計書には、「西洋式児屋様式外部」「内部式階三階座敷八日本式真壁塗り」と書かれています。内装は「日本式」とし、当時の人々に馴染みのあるものとしつつも、



写真7 長野市中部地図（当館蔵）（部分）

大正14年、道幅拡張後の中央道路付近の図。
善光寺からまっすぐ南に通っている中央道路が、末広町付近で大きく曲がり、長野停車場に向かっているのがわかる。

新たなデザインを取り入れた「西洋式」の建物だったといえます。この藤屋の建物は、宿場町だった当時の道を残しつつ新しい形をとっていく町の姿をよく表わしているといえるのではないのでしょうか。

エピソード 変わり行く町、変わらない心

町や参拝者の変化に応じて、藤屋は姿を変え、善光寺宿本陣からホテル、そしてレストラン・ウエディング事業に転換します。長野オリンピックの開催に伴い長野新幹線（現北陸新幹線）が開通したことにより、長野市は首都圏から日帰りで観光することができる場所となりました。そのため、善光寺参りに伴っての宿泊だけでなく、歴史的なイメージや風情を感じながらの観光

が求められるようになりました。現代においても藤井家は、こうした町の変化を敏感にとらえ、事業の転換を行っているといえます。時代が変わる中でも、藤屋は江戸時代からつづくおもてなしの心で人々を迎え、多くの人々を惹きつけてきたのでしょうか。

藤屋では、装飾品を揃え、多くの客人をもてなしてきました。これまで迎えてきた様々な著名人ゆかりの資料が伝えられてきており、その歴史を感じさせます。こうした藤屋の姿に代表されるように、善光寺町は、地域社会の変化に柔軟に対応してきました。新しいものを取り入れながらも、歴史を大切にしてきた町の姿を、本展で感じていただければ幸いです。

（樋口明里）

参考文献

- 浅野純一郎 2008 『戦前期の地方都市における近代都市計画の動向と展開』 中央公論美術出版
児玉幸多 1960 『近世宿駅制度の研究』 吉川弘文館
小林計一郎 1958 「長野県における明治初年の駅通制と中馬会社」『信濃』 10-10
多和田雅保 2019 「幕末期における善光寺町の家作形態と生業」『横浜国立大学教育学部紀要』 3
中村駿介 2022 「近世善光寺町の領有 検地帳を用いた善光寺大本願による大門町と西町の土地領有の分析」『日本建築学会計画系論文集』 802
増田廣實 1983 「明治維新时期における宿駅制度の諸問題（三）一売荷請継を中心に一」『文教大学女子短期大学部研究紀要』 27
山本哲徳・土本俊和 1997 「近世信濃善光寺門前町における大門町の原形とその変容」『日本建築学会計画系論文集』 496

- (1)藤井家では「本陣」という記載を用いてきたため、ここでも、藤井家にかかわる固有名詞は「本陣」の記載とし、一般的な名詞としては本陣を用います。
(2)当館所蔵の藤井家文書には、これら分家の藤井茂右衛門家の文書が含まれています。これらの家とは、養子縁組等があったため、その影響で文書が含まれている可能性も考えられます。また、別の家である藤屋平左衛門家の文書や、西之門町共有だったと考えられる文書が含まれています。別の家や町の文書が含まれた経緯は分かっていませんが、善光寺町には藤屋・藤井家が多くあり、様々な場での混在が推察されるため、今後整理が必要です。
(3)大門町は他の町とは特徴を異にしていること〔土本 1997〕〔中村 2022〕、幕末にはその他の町は町ごとに家業の傾向が定まっているわけではなく、多様な様相を示していたこと〔多和田 2019〕などが指摘されています。
(4)長野県では特に制度変更に伴う反発が強かったとされ、こうした変化は〔小林 1958〕〔児玉 1960〕〔増田 1983〕などに詳しく書かれています。
(5)こうした善光寺町における近代都市計画の展開については、浅野純一郎が〔浅野 2008〕で分析しています。

博物館だより 第135号 発行日2025年9月30日

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島町1414
TEL:026(284)9011
<https://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400
TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500